2012年11月11日(日)にアリベルト・ライマン&二期会のオペラ『メデア』を観に日生劇場へ行ってまいりました。入口で『本日千秋楽』という日本的表現の立札を目にして一瞬戸惑いました。今回はどういうわけか猫同士ではなく「バリトンからカウンターテナーまでこなす彌勒忠史さんってオペラはどの声でやるのかしら？」と実に人間離れした思考で行動が猫に近く、このホームページの中で英・仏・独・伊の言語間をオロオロ... いえウロウロしている人間：J.Hさんと一緒でした。開演前にイタリア語で「コメ・プリマ」を口ずさんでいたので「大丈夫ですか？今日のオペラはドイツ語ですよ」と念を押しましたが、なんとか無事に鑑賞でき、かなり感動したようです。

まずここで2012年6月30日に行われたシンポジウムの話を改めて思い起こしましょう。
ライマンは古典オペラの「穏健的な」要素を持っているが、彼のオペラに古典の特色である明確なビートは感じられない。そのため緊張感があり流動的である。しかし深く入り込むほどにその「ずれた美学」が人を惹きつける。台本が生きるか死ぬかはテンポの問題だというが、彼の台本にはアレグロとかアンダンテとかいう速度記号はない。♩＝〇〇と書かれているだけである。テキストの持つ速度とライマンの表示速度を理解することによって劇場の空間に合ったテンポが生まれる。

本日鑑賞したオペラはまさに流動的でした。引き込まれたのはストーリーというよりも明解な内容で進行する場面展開？不思議と心が引き込まれるオペラでした。それはもちろんスタッフや出演者の実力の賜物なのですが、悲劇なのに不思議な幸福感の余韻が心に染みわたったオペラでした。

Mオーケストラの配置

オーケストラ・ピットのスペースの都合で舞台上の両脇に金管楽器群が配置されていましたが、暗い中で楽器の金属がまさに星のように輝いて演出効果を上げていました。音の広がる方向性から言ってもここが吹奏楽器でよかった。

M歌と演奏のバランス

真正面に指揮者：下野竜也さんのつむじが見える位置なので当然指揮棒も見えましたが、「あれっ？振っているけれど音がない？」「あら？はっきりした音の切れ目だけれど、ブチ切れてもいないし、でも余韻というほどでもないし、この音の長さは何？」微妙な不思議感覚。演技の邪魔をせず締めるところではっきり表れる音楽の構成。あるようでない、ないようである音の存在感。音を小さくするときの下野さんの指先が印象的でした。

メデアとイアソンの掛け合い。歌だからもちろんセリフが音として伸びるのだけれど、言葉が絶対に重ならない。一人が言語音だとすると、そこに重なるのはもう一人の言葉を伸ばしたところの音だけ。つまり意味を持つ部分の言葉自体が重ならないから言語さえわかれば意味がわかる。

舞台上で演じている場面に徐々に近づくように、次に登場する人物の声が奥の方から聞こえ始める。つまり場面変換の予兆を人間の声で示してその方向へ気持ちを自然に向けていく流動的な場面展開。

M歌とダンス

メデアを演じた飯田みち代さんの心理表現は圧巻。メデアの苦悩が伝わってきてグッとくる瞬間が幾度もありました。そしてそれをさらに効果的にしたのは白い仮面をつけた人たちのダンス。振付：大畑浩恵さんとありましたが、素晴らしい苦悩表現。でも「あの姿勢で静止しているのはかなりきついだろうなぁ」と思わずダンサーに心の中で称賛の拍手を送りました。

M歌声

イヤソン(宮本益光さん)対クレオン(大間知覚さん)の声同士のバランス、クレオサ(林美智子さん)の人の良い明るさ。ゴラ(小山由美さん)の深さ。それぞれ良いキャスト。「使者」は男性なのでテノールの役かと思っていましたが、この場合、神託を暗示的に運ぶ役なのでカウンターテナーの彌勒忠史さんの声でよかったし、舞台全体の声のバランスからするとよいポイントになっていたと思います。また長い棒をバトンのように振り回せる人もなかなかいないかも。一瞬頭の中で歌舞伎の場面と剣舞がフラッシュバックしました。私が見たオーラ＝彼の放つ人間の懐的やさしい雰囲気も不思議な感覚の一つです。

シンプルだけれど効果的な舞台装置、衣装の美しさもよかった。演出は飯塚励生さん。演奏した読売日本交響楽団も日生劇場と同じ50歳でした。皆様素敵なオペラをありがとうニャ～。　(2012.11.11記)